

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

《 91 》

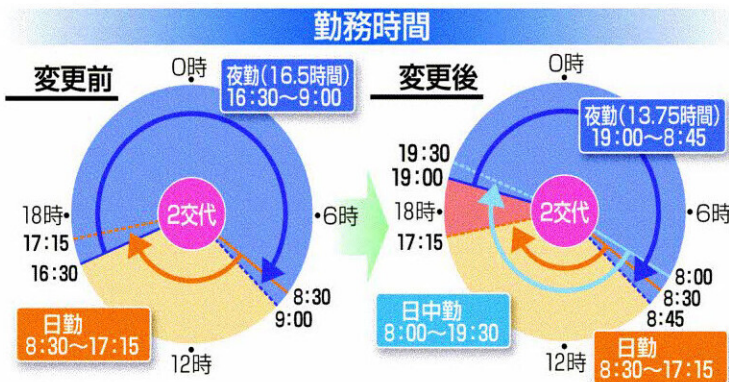


植田美由紀
看護局長

県立中央病院看護局は患者に満足してもらえる、質の高い看護の提供を目指している。働きやすい職場環境づくりもその一つの取り組み。看護方式の見直しや新しい勤務体制を導入し負担の大きい夜勤時間を短縮するなどして、職員からはおおむね好評だという。看護局長の植田美由紀さんは「看護師が元気で生き生きと働くことがいい看護につながる」と話す。

植田看護局長によると、夜勤時間を短縮した新しい勤務体制は、今年の3月から試行的に導入し、6月には7病棟で実施。これまでの午後4時半から翌日午前9時までの夜勤時間を2時間45分短縮し、午後7時から翌日午前8時45

夜勤短縮、心身の負担軽減



分までにした。短縮分は、これまでの日勤(午前8時半から午後5時15分)に加え、日中勤(午前8時から午後7時半)を新設して補った。夜勤で職員にかかる心身の負担を軽減し、ワークライフバランスを充実させることなどを狙う。

一方、新たに試みた看護方式はパートナースhip・ナースィング・システム(PNS)と呼ばれるもので、福井大医学部付属病院の看護部が開発したという。

県立中央病院では、看護業務が多様化、複雑化してきている中で、経験の浅い看護師とベテラン看護師との知識や技術の差を埋め、質の高い看護をどの患者にも提供するための方策として導入を検討。これまでの看護師1人が複数の患者を受け持つ看護方式から、パートナリーを決め看護師が2人1組で互いに補充し協力し合いながら

新人(右)と5年目の看護師がベアに患者のケアなどに当たる＝甲府・県立中央病院(同病院提供)

どちらの取り組みも成果がはじめていて、「夜勤後の疲労感が少ない」「新人看護師の教育に有効だ」といった現場からの声があるという。植田看護局長は「職場環境を改善して質の高い看護を提供することで、職員のモチベーションが向上し人材の定着・確保につながるという好循環を目指したい」と話す。

※第4木曜日に掲載します

